

空き缶拾いの極貧生活、ブラック職場でのパワハラ被害、1日20時間労働で年収200万円台…。ITベンチャー「ラスク」(札幌)の水沢堅一郎社長(41)は「人生詰んでる側だった」と振り返る。創業6年で従業員100人以上に事業を拡大し、中小企業向け人工知能(AI)サービスで急成長を遂げる水沢氏に、逆転人生の原動力を聞いた。

### 空き缶拾い稼ぐ

—どんな少年時代を過ごしてきましたか。

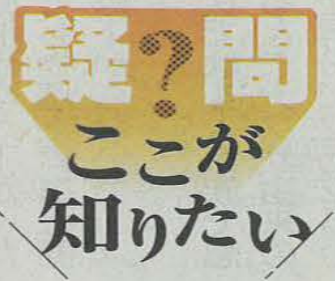
「家庭の事情でお金がなくて、服や靴はボロボロのお下がりを身につけていて、いじめにも遭いました。自分で稼ぐしかないと思い、小学2年のころ始めたのが空き缶拾い。(後志管内仁木町の)隣の余市町にも足を運び、ゴミ箱から拾ったり公民館を回ったりして、月5千円くらい稼ぎました。近所の除雪、草むしり、犬の散歩、新聞配達などもやる『何でも屋』でした。とにかく将来はお金に苦労したくないと

ラスク社長

水沢 堅一郎氏

## Q. 極貧から大逆転、中小向けAIでなぜ急成長

## A. 世界を目指す できると信じて



— 社会に出てから、どんな仕事をしてきましたか。

「18歳の時に自動車部品工場の期間工として、工場内で部品を運搬する仕事をしていましたが、暴言や殴る蹴るなどの被害を先輩期間工から受けました。正社員登用のラ

### 殴る蹴る被害も

イバルを一人でも辞めさせたかったんでしょね。コピー機の法人営業の仕事では、壁に向かって営業トークを練習する『壁ロップレ』をほぼ寝ずに3日間やらされ、血を吐いたことも。印刷工場の飲み会ではビール瓶で頭を殴られました。1日20時間労働のパチンコ店や、コールセンターなども経験しました」

— 1年収はどのくらいでしたか。

「30歳過ぎまでずっと200万〜300万円。底辺とかワーキングプアと言われるような暮らし

が長く、『会社が悪い、世の中が悪い、景気が悪いからだ』と信じていました」

— 転機は。

「33歳のころ、北海道を出て、友人の紹介で大阪のIT企業で営業の仕事に就きました。今までうまくいかないことはすべて周囲の環境のせいにしてきました。でも、友

人のためと思って仕事に打ち込んだら、業績も人間関係もうまく回り出してトップセールスに。人のために働くことの大切さを実感したことは大きかったですね」

— ラスクを創業したのは、新型コロナ禍の20年11月でした。

「家族の都合で北海道に戻るようになったのですが、学歴や職歴などがネックとなったのか、どこからも採用されませんでした。じゃあ起業しよう、と。コロナ禍だからこそ、大きな事務所はいらないし、フルリモートの仕事なら逆にエンジニアを確保しやすいと考えました。月4千円のレンタルオフィスからのスタートでした」

### 国内外に13拠点

— ラスクの事業内容を教えてください。

「『SES』と呼ばれるシステムエンジニアリングサービス、つまりIT人材の提供や、システムの受託開発を手がけています。鉄道会社や通信会社などと取引があまり

す。企業が自社で賄いきれないニーズを丁寧にすくい取ることで規模を拡大していき、海外4拠点を含め国内外に13拠点を構えています。テクノロジーと人の力を融合させて、社会に新しい可能性

を届けることを目指しています」

— 今期は前期の2倍近い売上高10億円を見込んでいます。どう実現しますか。

「中小企業のAI活用をサポートするコンサルティング業務が伸びています。人手不足が深刻化する中で、持続的な成長のためにも、文書作成やデータ転記などAIに任せられる業務は任せて、人間は対面が必要な仕事に専念するべきです。ただ、中小企業は『お金がない』『時間がない』『わからない』という理由でAIを敬遠しがち。当社では、基礎知識を教えるのはもちろん、100社あれば100通りのAI活用を提案できます」

— 将来的には売上高1兆円を目指しているそうですね。本気ですか。

「AIで世界を目指す企業をつくったつもりですが、特別な才能がなくても、諦めなかつただけです。どんな境遇でも、思いと行動で人生は切り開ける。だから『あなたにもできる』ということを伝えたいです」

「もちろんです。AIは世界を目指す企業をつくらなくても、特別な才能がなくても、諦めなかつただけです。どんな境遇でも、思いと行動で人生は切り開ける。だから『あなたにもできる』ということを伝えたいです」

(工藤雄高)



デジタルに  
詳細



みずさわ・けんいち 後志管内仁木町出身。有朋高中退。工場やパチンコ店勤務、営業職などを経験し、2020年に札幌で「ラスク」を創業。25年10月期の売上高は5億3千万円。社名は愛犬のトイプードルの名前から。